

二〇〇三年(平成一五年)、一八年間の高校社会科教員としてのキャリアを閉じ、広島大学に勤務するようになると、いくつかの学校からさまざまな相談を受けるようになり、また、それらの学校では、困難な状況に直面しつつも真摯な取り組みをしておられました。私は実際にそうした学校に入り、子どもたちの様子や先生方の取り組みを観察させてもらいました。各校の実践は必ずしもうまく機能してはいたわけではなく、教師としての効力感や自尊心を傷つけられ、時には病気休職や退職に追い込まれてしまう教師が少なくないことに心を痛めました。

とはいえ、当時の私にあったのは一八年間の高校教員生活のなかで積み重ねた個人的な実践経験だけでした。今振り返れば、当時の実践もおおむね間違っていないかと思えますが、そうは言っても、理論的な裏づけも弱く、構造化されたものでもありませんでした。私は各校の支援に取り組みながら、その支援をより体系的に組み直すことではできないかということばかり考えていました。

支援を体系化するにあたり大きな影響を受けたのは、ア

メリカの包括的生徒指導の考え方です。当時、アメリカのスクールカウンセリングを紹介する書籍が相次いで日本でも出版されました。また、アメリカを訪問する機会にも恵まれ、実際に視察をした際のインパクトは非常に大きいものがありました。

ただその一方で、「小学校や高校にはスクールカウンセラーすら配置されていない日本に、アメリカ的な多職種協働モデルを持ち込むことは現実的ではない」という思いもあったわけです。そうした思いをもちながら、カナダやイギリス、オーストラリアといった国々の視察を続けていったわけですが、強く影響を受けたのは、香港や台湾、シンガポールや韓国といったアジアの国々です。これらの国々はアメリカのモデルに学びながらも自国のシステムを生み出しつつあります。

こうした国々の実践に学びながら、「生徒指導の目的は、学校が落ち着くことではなく、一人一人の全人的な成長を保証することであるはずだ」そのためには日本人の特質や日本の教育の現状を踏まえたモデルをつくる必要がある」

という思いを強くもつようになっていきました。

こうしてマルチレベルアプローチ（MLA）は生まれることになったわけです。「はじめに」で書いたとおり、その開発に初期の段階から携わったのは、石井眞治、小玉有子、高橋あつ子、金山健一、神山貴弥、沖林洋平、米沢崇、山田洋平、中林浩子、そして私の一〇名のメンバーです。広島市教委や総社市教委の先生方との協議も大いに生かされています。

本書はこうして生まれたMLAの現在の形を示したもので、『月刊学校教育相談』の連載「マルチレベルアプローチ―日本版包括的生徒指導の理論と実践」(二〇一五年四月号―二〇一七年三月号)に一部修正を加え、一冊にまとめたものです。

ただ、これがゴールとは思っていません。現在は、キャリア領域で鈴木建生、幼児教育分野で現場をよく知る佐藤博子が加わり、さらには、スクールカウンセラー経験を持つエリクソン・ユキコ、山崎茜、長江綾子、不登校やいじめ研究を行っている中村孝、教科教育領域で中井悠加といった若いメンバーも加わってきています。こうしたメンバーとともに、MLAをさらに発展させることができましたと考えています。このほかに、歴代の栗原ゼミ所属の学生たちが、感謝してもしきれないほどの、実に多面的な協力をしてくれています。卒業生たちは現場で実践者となつてく

れています。

さらに数年前、子どもの支援に携わるさまざまな立場の方々や先生方を支えるために、「教育を通じて子どもたちに明るい未来を」というスローガンのもとに、公益社団法人学校教育開発研究所を設立しました。この法人では、MLAを取り入れ実践したいという先生や学校のために、より詳細なノウハウや、「はじめに」で挙げた自治体で展開している教員研修や実践をWebサイトで公開しています。

MLAを学び、実践するとき、教師は教育への誇りと自信を取り戻し、学校に熱い協働がよみがえります。それが学校に対する地域の信頼と協力を生み出していきます。そしてそれは学校を、子ども、教師、保護者、地域の方々とつとて「だれもが行きたくなる学校」へと変えていくのです。

本書を手にした皆さんが、そのような変化を体験されることを願っています。

二〇一七年九月

広島大学大学院教育学研究科教授

公益社団法人学校教育開発研究所代表理事

栗原 慎二